僕は緑が絶対にいい

近藤　朗

ある商業施設での一コマです。アイスクリーム屋さんのメニュー表を前に、お父さんと三歳くらいの男の子がやり取りをしています。

「ぼくはみどり。ぜったいぜったいみどり。このアイスとこのジュースどっちも。」

と大きな声で駄々をこねる。その脇でお兄さんらしき子は好みのアイスをゲットし、おとなしく椅子に座って食べている。お父さんはダメとは言えず、

「お母さんが来たらお母さんに相談しなさい。」

と。

お母さんが来ると、

「ぼく、りょうほうみどりがいい！」

と母親に必死に訴える。お母さんは、

「ぼく、どちらか一つだけにしなさい。二つとも抹茶だから、チョコかイチゴにしたらいいんじゃない？」

「やだ。ぼくみどりの。どっちも。」

上の子はもうすぐ食べ終わりそう。お父さんはたまらず、

「どっちも頼みなさい。お父さん支払うから。」

と負ける。

このとき、近くでこの様子を見ていた私の連れ合いが大笑いしてしまいました。すると、男の子はハッとし、気まずそうに母親にしがみつき顔を隠します。さすがお母さんです。すかさず、

「緑のアイス一つでいいね。」

するとぼくは、

「うん、ぼくみどりがすき。」

子どもは、一時に大きくはなれません。自我を張る時期もあります。このような何気ない日常の積み重ねの中で、少しずつ少しずつ成長をしていくものです。つくづく親って大変だなぁと思います。でも、親もまた、親として子どもと共に成長していくのだろうとも思います。

子どもの成長には、食べ物を与え、着るものを与えるだけでは不十分です。親だけができること、それは温かい愛情をいっぱい掛けることでしょう。

ほんの一瞬のドラマ。商業施設で出会った親子ではありますが、みどりがいいの男の子は就学する頃にはどのように成長しているのだろうかと、私はとても楽しみな気持ちになりました。

もうすぐ冬休み。それぞれのご家庭でどのようなドラマが生まれるか楽しみです。